

えいらい

No.8

平成23年5月発行

発行元/財団法人永頼会 松山市民病院

春号
2011〒790-0067 愛媛県松山市大手町2丁目6-5 TEL/089-943-1151 FAX/089-947-0026
発行責任者/院長 山本祐司 編集/松山市民病院広報委員会新しい仲間と共に
災害に備えよう

副院長 萩山 吉孝

3月の東日本地震の被害は甚大なものでした。観測史上最大の強さと規模のため、当然被害も想像を超えたものとなりました。古い記録が貞観年間にあり、1000年を経て繰り返される大地の動きに、人の存在の小ささを覚えざるを得ません。津波により生命を奪われた方は2万人を越えると予想され、多くの被災者が、今なお避難所での生活を強いられているとの報道があります。

西日本にて影響がなかった医療者としては、受傷者の救援へと向かうべきところですが、当院の行動は災害拠点病院の支援病院として、要治療者収容への待機までにとどまりました。災害の2日後には200チームのDMATが被災地に出向いたそうです。ただ、今回の犠牲者の多くは救命不能であったようで、以後は避難者の医療支援がメインとなりました。災害地という特殊な現場で活動するためには、知識と経験が必要です。当院でも身近の問題として、人材養成の必要性を感じます。ふりかえれば、当地でも近くに断層地帯があり、いつ同様の災害に見舞われるかわかりません。当院では、昨年からの近隣の防災組織、消防本部との共同の防災訓練が開始されました。これをいかして、各人が普段から備えるようにしたいものです。医療

者は災害時にはまず自ら身を守る、次いで救助、医療活動にあたるという基本を再確認しましょう。またハードの面では、旧病棟が耐震基準を満たすべく、立て替えが急務となっています。

災害にしろ何にしろ、人の記憶は三日、三月、三年の区切りで薄れてゆくといわれますが、組織としての記憶や備えは何十年、まして国としては百年単位での構えが必要といわれていることが、いまさらながら思い知らされます。

災害の有無にかかわらず季節は到来し、桜とともに当院でも人事の異動がありました。このたびは11名の新任医師を迎えました。泌尿器科、眼科は常勤医が増員、新たに神経内科専門医(非常勤)が着任し、看護師、技師21名が新たに仲間になりました。

診療の面では、脳卒中、大腿骨頸部骨折の地域連携バスが運用開始しました。連携する先生方の利便性を高めるべく新たな地域連携システムも導入計画中です。連携医療機関とはさらに緊密な関係を築いてゆくつもりですので、よろしく願いいたします。



呼吸器外科/魚本昌志(大洲市丸山公園)